

5. 中山城跡第4次・中山近世墓 発掘調査報告

1. はじめに

ここに記す調査報告は、府道西神崎上東線の拡幅に伴い京都府中丹東土木事務所の依頼を受け実施した舞鶴市中山・水間に所在する中山城跡・中山近世墓についてのものである。

中山城跡・中山近世墓は、『京都府遺跡地図』などで周知されている戦国期の山城と近世の古墓である。中山城は丹後守護職、一色義道が細川・明智勢に攻められ自刃したと伝える城で、標高60m、城郭の幅約20m、延長500mを測り、東側は深田、西側は塹堀と険峻な急坂が由良川に没する。北側には大規模な空堀二か所を設け、さらに川を廻らしており、南は一色氏の建部山城跡に通じている。

中山城跡の調査は、上記事業のため昭和57年度(第1次調査)と昭和58年度(第2次調査)に行われており、昨年度(第3次調査)の試掘調査を受け、今回の調査を実施する事となった。現地調査は、平成19年6月19日～同年8月10日までの前半にA地区(南半部)100㎡と同年10月2日～同年12月21日までの後半にB地区(北半部)600㎡に分け合計700㎡行った。

調査は、調査第2課第2係長森正と同主任調査員戸原和人が担当した。

調査に係る経費については京都府中丹東土木事務所が負担した。

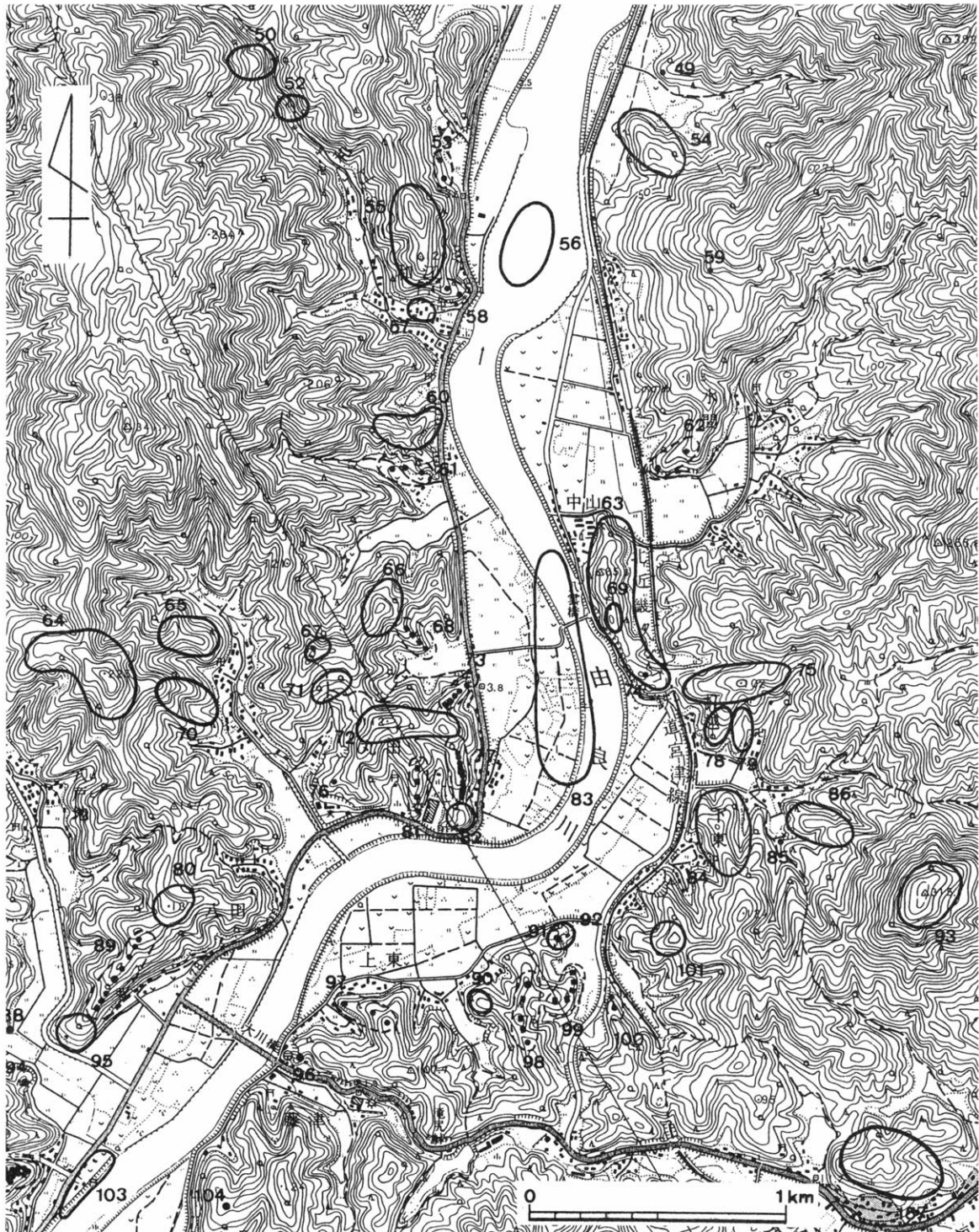
調査にあたっては京都府教育委員会、舞鶴市教育委員会、八雲区長会、神崎区長会、近隣住民の方々の協力、ご指導を得ました。また、地元地区有志の方々、調査補助員、整理員として参加していただいた方々に対し、感謝の意を表します。

2. 調査概要

今回の調査は、前述のように二時期に分けて実施した。6月から8月にかけては、本年度調査予定区の南半部(A地区)で近世墓を中心とした調査を、10月から12月にかけては、北半部(B地区)で中山城にかかわる空堀・土塁・曲輪を中心とした調査を行った。

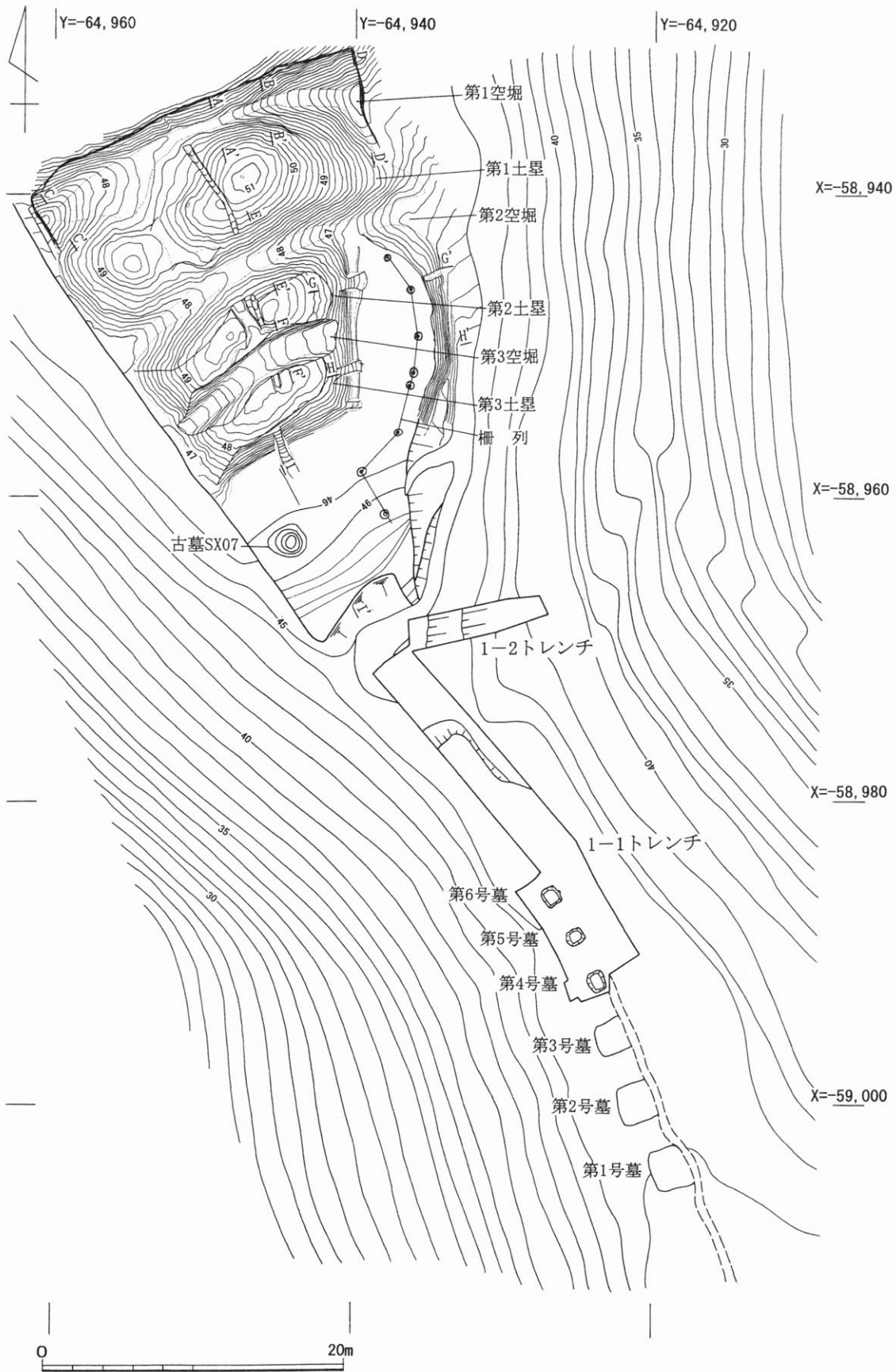
中山近世墓は、昭和58年に6基からなる土葬墓のうち1～3号の3基が調査された(第2次調査)。今回の調査では残りの4～6号の3基を調査したが、現地調査に入った段階には昭和58年に測量されたマウンドの正確な位置が特定できない状況であった。検出した遺構の概要、出土遺物は以下のとおりである。

A地区(第2～4図 図版第1～3) 標高60m前後で幅約15m前後の細い尾根筋の稜部に一列に近世墓が並んでいる。調査地の北端付近では東に開く地山の岩盤を削り出した凹みが検出され



第1図 調査地位置図(『京都府遺跡地図』第3版 第1分冊 1/25,000)

45. 蒲江城跡 46. 城島遺跡 50. 国分寺跡 52. 和江奥遺跡 54. 蒲江大田城跡 55. 和江城跡
 56. 和江遺跡 58. 和江1号墳・和江2号墳 60. 和江宮ノ谷城跡 63. 中山城跡 64. 八田コヨリ城跡
 65. 丸田安ノ奥城跡 66. 丸田斎宮城跡 67. 丸田天神社遺跡 69. 中山近世墓 70. 丸田山田城跡
 71. 祇園寺跡 72. 丸田宮ノ谷城跡 75. 打越城跡 78. 岡ノ谷城跡 79. 寺ノ谷城跡 80. 八田城跡
 82. 丸田東城跡 83. 八雲遺跡 84. 佐織城跡 86. 千坂城跡 90. 臼井城跡 92. 一ノ木城跡
 93. 建部山城跡 95. 八田支城跡 103. 大川遺跡 157. 福井城跡



第2図 調査地平面図

た。

第4号墓 S X 04 昭和58年の測量図によると約40cm程度のマウンドがみとめられ、外周に幅約50cmの溝が方形に廻る。今回検出した墓壙は平面方形を呈し、上端で1.2×1.2m、下端で0.65×0.95m、深さ1.3mを測る。墓壙からは錫杖、透彫菊形鋌、布、引手金具、壺金具、古銭(寛永通宝)6枚などが出土した。

第5号墓 S X 05 昭和58年の測量図によると約40cm程度のマウンドがみとめられ、外周に幅約50cmの溝が方形に廻る。墓壙は平面方形を呈し、上端で0.9~1.0×1.15m、下端で0.7×0.8m、深さ0.7mを測る。墓壙からは錫杖、壺金具などが出土した。

第6号墓 S X 06 昭和58年の測量図によると約20cm程度のマウンドが認められ、外周に幅約30cmの溝の痕跡が廻る。墓壙は平面長方形を呈し、上端で1.2×1.0~1.05m、下端で0.85×0.95m、深さ1.2mを測る。墓壙からは錫杖、銅椀、鋌金具、古銭(寛永通宝)6枚などが出土した。

B地区(第2~4図 図版第3~5)

土塁・空堀 尾根筋を切断して造営した空堀と、空堀の間に掘り残して盛り土したと考えられる土塁とからなる一連の遺構である。空堀は東西とも尾根の裾に向かって縦堀となって延びている。

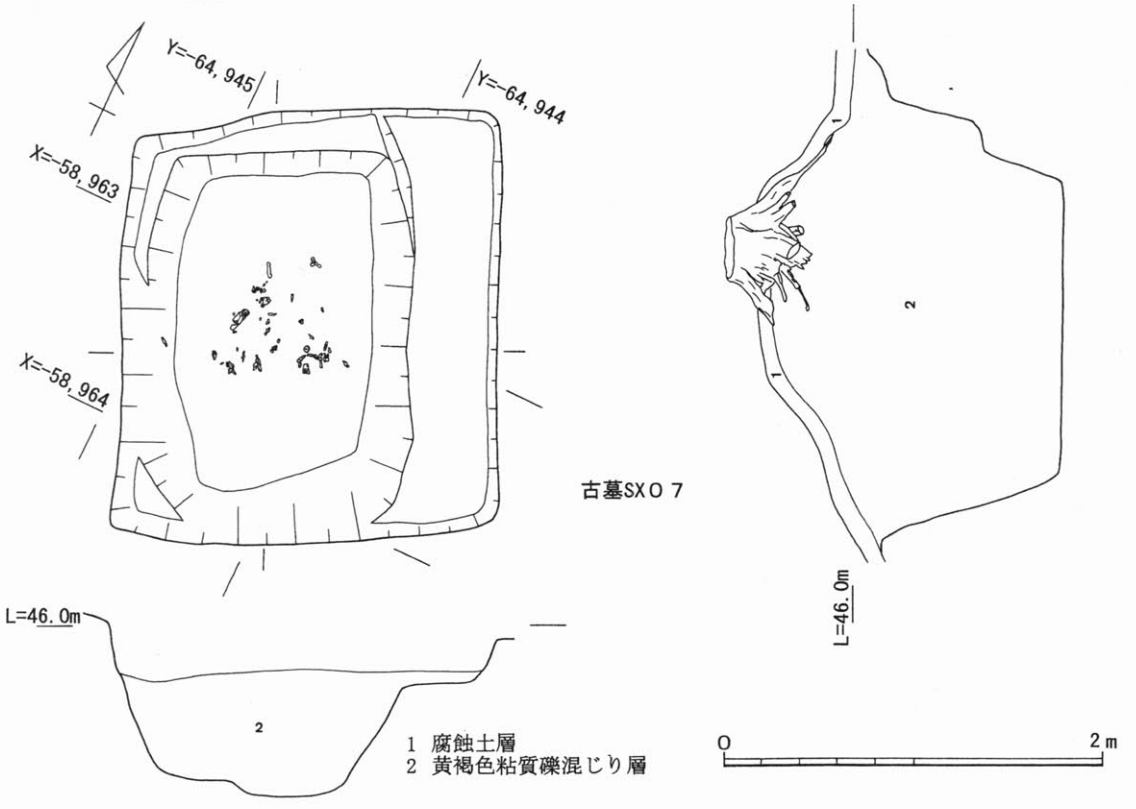
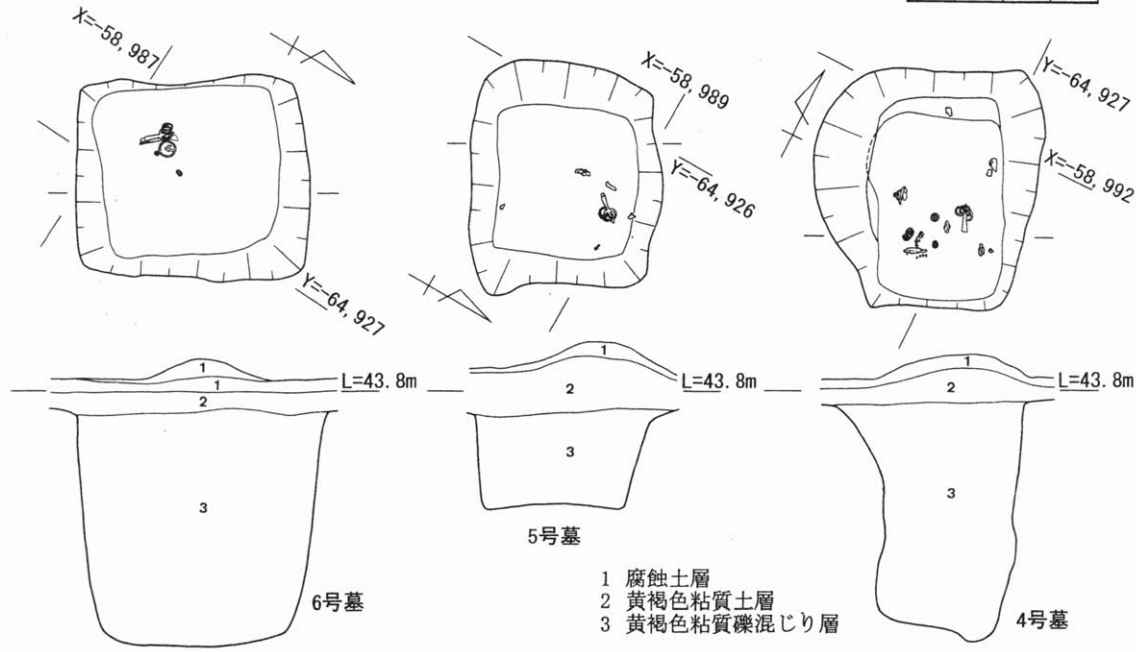
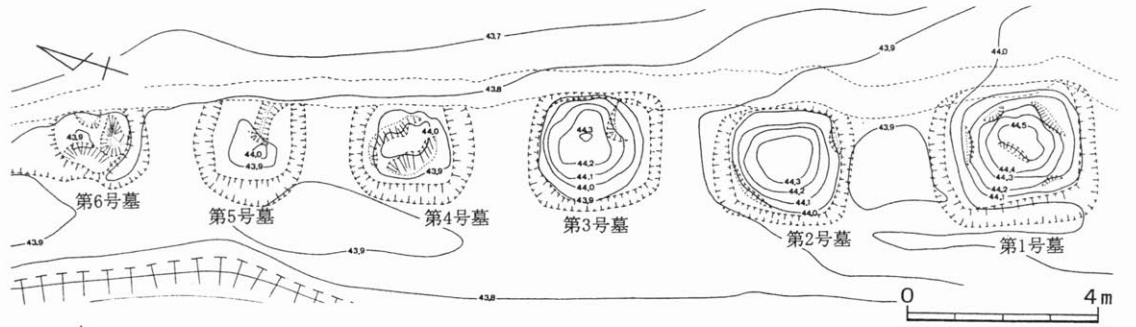
第1空堀 堀切の幅は尾根の頂部で約4.0m、調査区の西端で約5.7m、東端で約7.0mを測り、東西約23mを検出した。空堀の断面はV字形を呈している。堀底は尾根の頂部で約0.4m、西端で約1.5m、東端で約1.8mを測る。堀の削り出し角度は、北側斜面で40~56°、南側斜面で約50°を測る。調査地内での堀底の勾配は、尾根の頂部から西斜面で8~25°、東斜面で6~18°を測る。

第2空堀 堀切の幅は尾根の頂部で約3.5m、調査区の西側の最も広い部分で約4.5m、東側の最も広い部分で約5.0mを測り、東西約22mを検出した。空堀の断面はU字形を呈している。堀底は尾根の頂部で約1.1m、西端で約1.0m、東端で約0.9mを測る。堀の削り出し角度は、北側斜面で32~46°、南側斜面で32~48°を測る。堀底の勾配は、尾根の頂部から西斜面で10°、東斜面で12°を測る。

第3空堀 堀切の幅は尾根の頂部で約2.2m、調査区の西側の最も広い部分で約3.0m、東側の最も広い部分で約2.7mを測り、東西約12.5mを検出した。空堀の断面は逆台形を呈している。堀底は、同じく頂部で約1.4m、西端で約1.1m、東端で約1.5mを測る。堀の削り出し角度は、北側斜面で56~66°、南側斜面で44~54°を測る。堀底の勾配は、尾根の頂部から西斜面で10~18°、東斜面で6~8°を測る。

第1土塁 最も北側に位置する土塁で、後世に中央部が通路状に抉られている。東西およそ25mを測る胴部の膨らむ長方形の平面をもち、断面は台形である。中央付近で、第1空堀の底から2.26mの高さを、第2空堀の底から2.81mの高さをそれぞれ測る。

第2土塁 第1土塁と第3土塁の間に位置する土塁で、後世に中央部が通路状に抉られている。東西およそ17mを測り、平面形は短冊形である。中央付近で、第2空堀の底から1.42mの高さを、



第3図 古墓実測図

第3空堀の底から1.49mの高さをそれぞれ測る。

第3土塁 最も南側に位置する土塁で、東西およそ13mの短冊形を呈する。中央部がわずかに通路状に挟れている。中央付近で、第3空堀から0.39mの高さを、南側の曲輪から2.85mをそれぞれ測る。

曲輪 第2・第3土塁の東側に幅5.5mの曲輪が、それに連続して南側に幅10mほどに復元される曲輪が築かれている。土塁の東側では、第2・第3土塁の裾部の岩盤を削り出し、斜面側に盛り土を行っている。第2土塁の東では勾配63°で表土と岩盤を削り、基底部分で幅50cm、深さ10cmに掘り込み排水溝としている。曲輪の斜面側は表土を削り、勾配18~28°に成形したのち、最下層に旧表土を積み、黄褐色土、赤褐色土、岩盤を削った礫というように、周辺の堆積層の逆の状況に盛り土を施している。第3土塁東では勾配45°で削り、基底部分で幅50cm、深さ20cmで掘り込み排水溝としている。排水溝の勾配は南に流れる構造となっている。曲輪の斜面側では、同じく表土を削り、勾配40°に成形したのち、上記と同じく堆積状況で盛り土を施している。

南側の曲輪は、自然地形である18~30°の岩盤の勾配を、第3土塁南面では勾配52~58°に岩盤を削り、土塁の基底部分から約2.4m以南では標高約45.5mまでは表土層を削り出し、最下層から緑黄褐色粘質土、乳白色粘質土、赤褐色粘質土礫混り、黄褐色粘質礫混り、赤褐色・黄褐色粘質礫混りの盛り土によって平坦地を造成している。

柵列 曲輪の東縁から南縁にかけて1条の柵列を検出した。東では直径約50cmの柱掘形が曲輪の外郭にそって8基並び、南で一度西にクランクしてまた南に延びる。柱列の屈曲部にはその東側に北に向かって延びる平坦部があり、出入口の可能性が考えられる。柱の延長部分である調査地の南側は、後世の削平を受けており柱掘形を検出する事ができなかった。

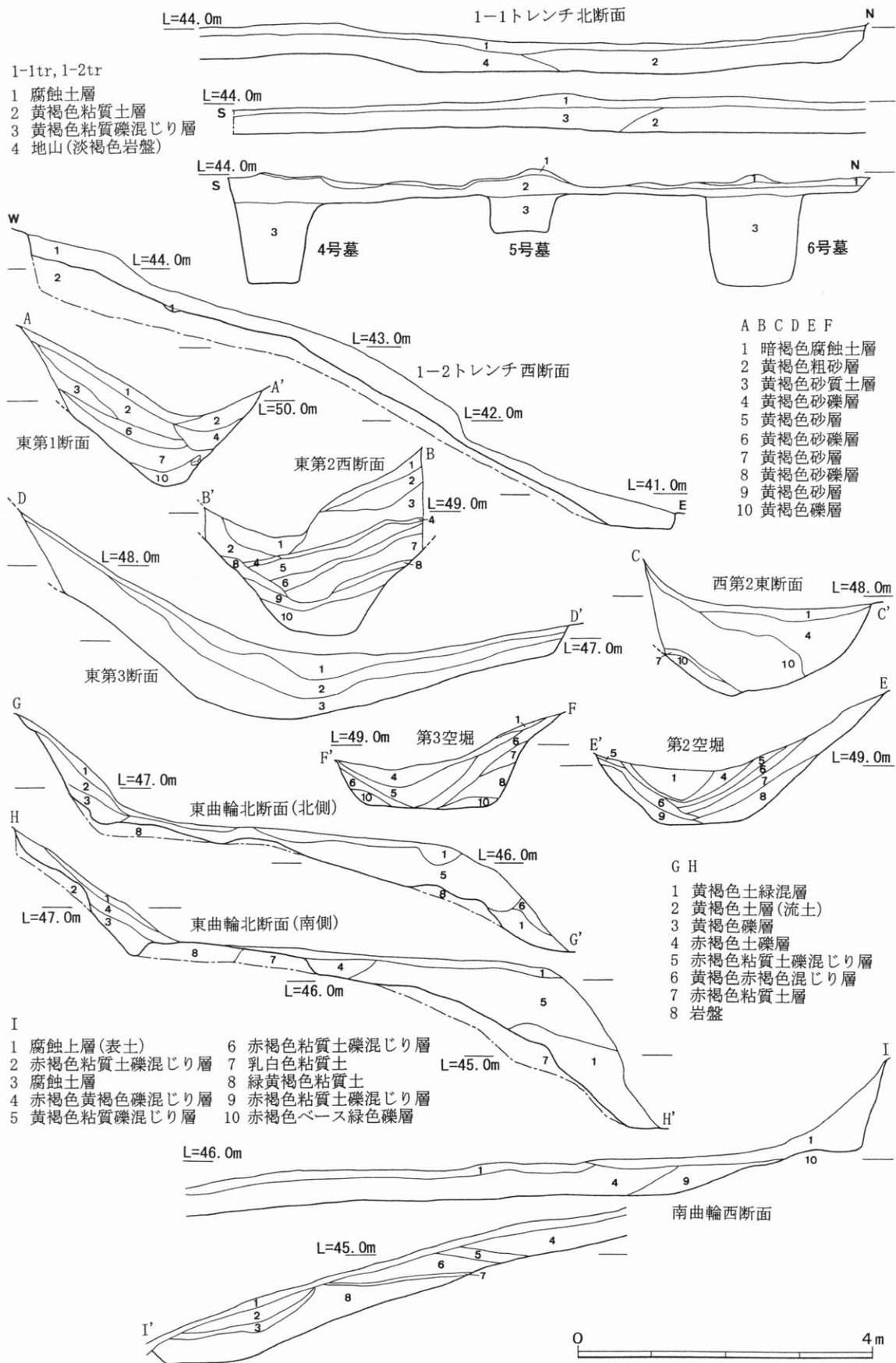
第7号墓 S X 07 曲輪の南西よりに平面楕円状を呈し、高さ約40cmのマウンドが遺存していた。墓壇は平面方形で、上端が1.5m×2.1mを測り、地表面から約1.0mで人骨の下顎及び上顎の歯、鉄釘、唐銭・北宋銭・明銭などの古銭が出土した。

出土遺物(第5~7図 図版第6)

今回の調査で出土した遺物は、古墓内から出土したものがすべてである。1~12は第4号墓から出土した。13は第5号墓から出土した。14~18は第6号墓から出土した。

第4号墓 S X 04出土遺物

錫杖・柄 1は墓壇の南東よりで頭を北よりにむけて出土した。錫杖は大きく区分すると上から杖頭部(錫)と木柄部、石突との三部分に分けられる。今回出土した杖頭は頂部を五輪塔の形状に作り、大環(外輪部)を心葉形につくっている。これに揺ると音を発する小環を数個(普通六個)つけているが、今回の調査では5個出土し、1個欠落している。錫杖は杖頭が摩耗して地輪部のみ残存しており、その欠損部を磨いている。また木製の柄の一部が残っていたが、墓壇の大きさから柄の短い手錫杖と考えられる。また、他の錫杖より小振りで、製作時に使用した鋳型の違いを示している。金属部の長さ13.7cm、大環部での幅6.4cmを測る。



第4図 調査地断面図

透彫菊形鋌 2～6は墓壙の南よりの錫杖の周辺で5個出土している。直径3.8cmの銅板をたたき出しドーム型とし、「花卉形」の透かし穴を放射状に10孔穿つ。中心の天頂部に直径5mmの丸頭割り鋌を差し込み、裏側に当て板として銅製の円板で布を挟み綴じている。布には金糸が認められる。

古銭 7～12は墓壙の南東よりで錫杖の南から寛永通寶6枚が重なって出土している。7・9～12は字体から古寛永(1636～1659年)と考えられる。8は肉眼観察上では不明である。

引手金具 25は墓壙の西よりの中央付近で出土している。櫃の蓋に取り付けられていたもので、身部に取り付けられていた壺金具と対をなし、錠(鎖子)を取り付ける金具である。

壺金具 26は墓壙の西よりの中央付近で引手金具の下から出土している2個一対の壺金具を10.4cm×3.1cmの鉄板に取り付けたもので、櫃身に鉄釘により打ち付けている。

第5号墓S X 05出土遺物

錫杖・柄 13は墓壙の北東よりで頭を北よりに向け出土した。杖頭が摩耗していて火輪より上部が欠損していて、その頂部を磨いている。小環は3個欠落している。金属部の長さ15.7cm、大環部での幅7.2cmを測る。

壺金具 27は2個一対の壺金具を幅2.6cm(長さは欠損のため不明)の鉄板に取り付けたもので、櫃身に鉄釘により打ち付けている。

第6号墓S X 06出土遺物

錫杖・柄 14は墓壙の南西よりで頭を北よりに向け出土した。錫杖の下からは人骨の一部が出土している。3基の出土品の中で最も遺存状態のよい製品である。頂部の五輪塔形のものもすべて残っており、小環も1個欠損するのみである。金属部の長さ15.6cm、大環部での幅6.6cmを測る。

銅椀 15は墓壙の西よりの中央付近で錫杖の東から出土した。口径8.4cm、器高3.2cmを測る。

菊形鋌・布 銅椀の中から1点(16)、銅椀の南に接して1点(17)の2点が出土している。直径1.9cmの銅板を傘状の山形にたたき出し、中心の天頂部に小型の割り鋌を差し込み、裏側に当て板として銅製の円板で布を挟み綴じている。布には金糸が認められる(18)。

古銭 19～24は銅椀の東で出土した。寛永通寶6枚が重なって出土している。19・21は字体から新寛永(1668年以降の鑄造)と考えられる。22・24は古寛永、20は現段階では不明。

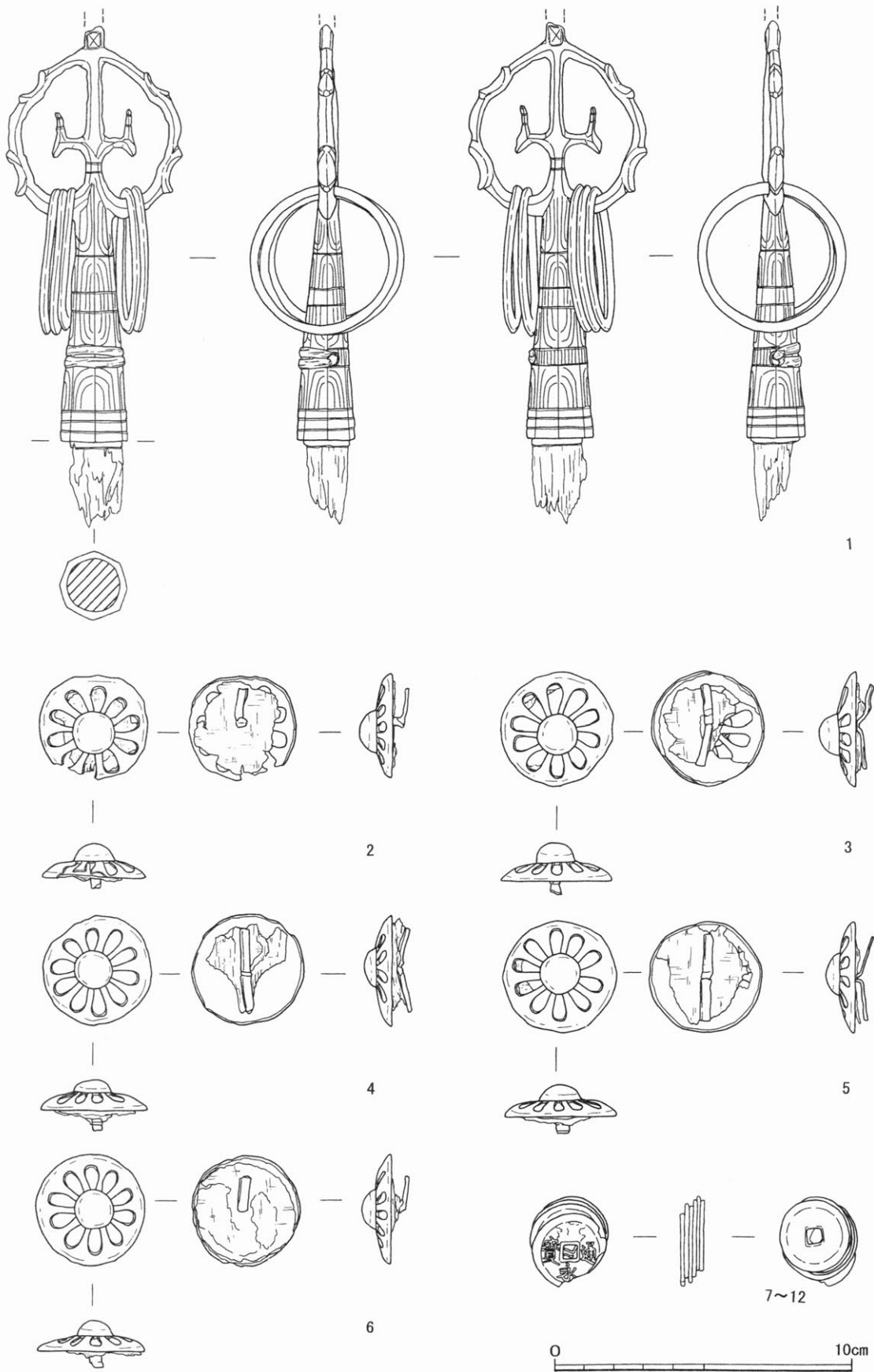
第7号墓S X 07出土遺物

鉄製品 棺に使用されていた釘が数多く出土している。出土状況は長方形の分布を示しており、上下にもレベル差をもっていることから立体的な箱が復元可能である。

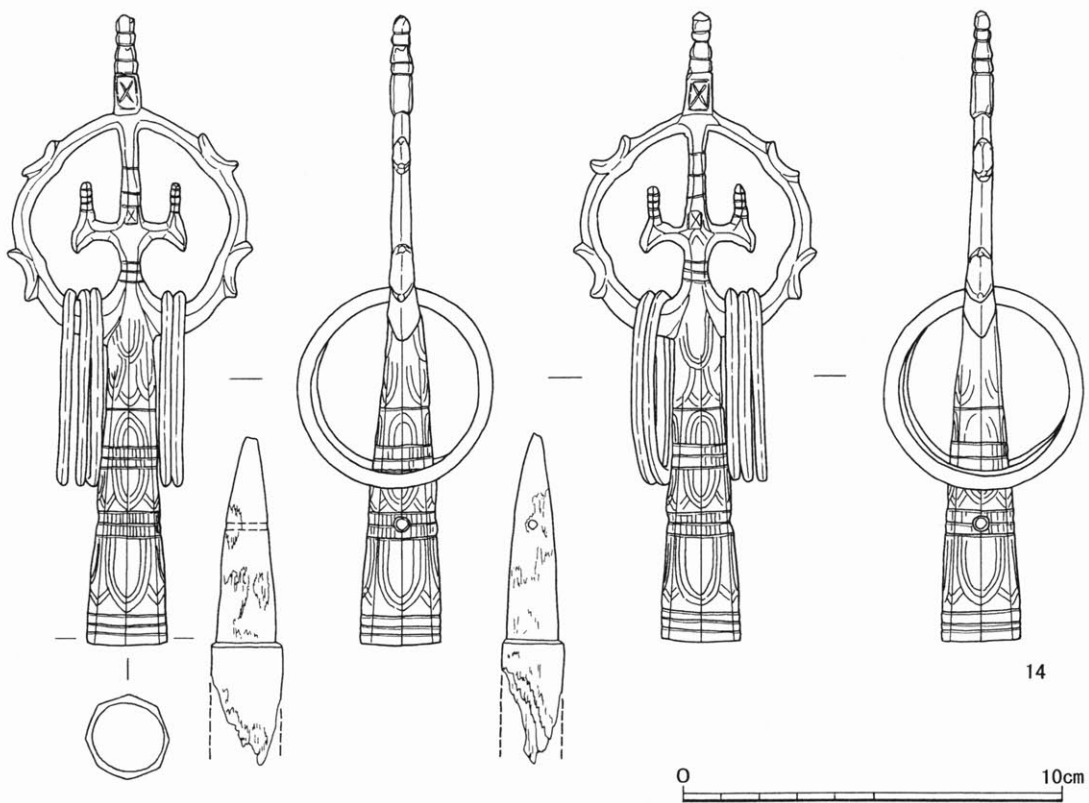
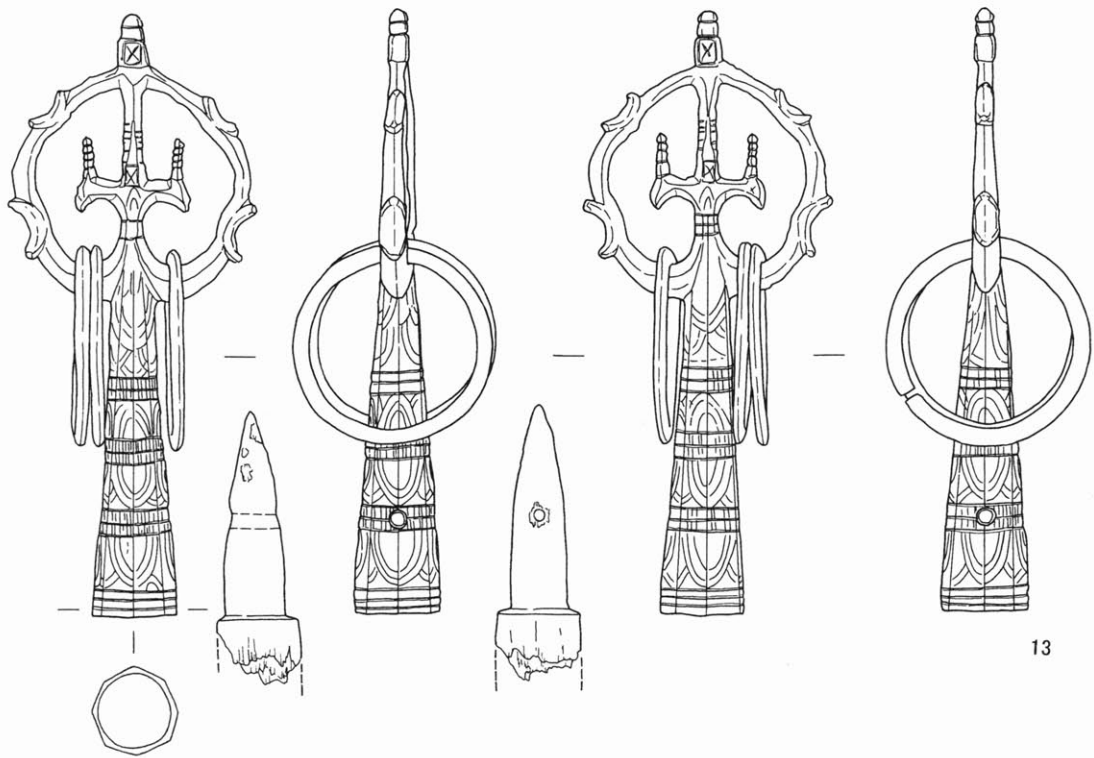
古銭 墓壙の中央、南東寄りから出土した。釘の出土分布範囲の中にあたり、棺内に納められていたと考えられる。古銭には唐銭の乾元重寶、北宋銭の元豊通寶、明銭の洪武通寶がある。

3. まとめ

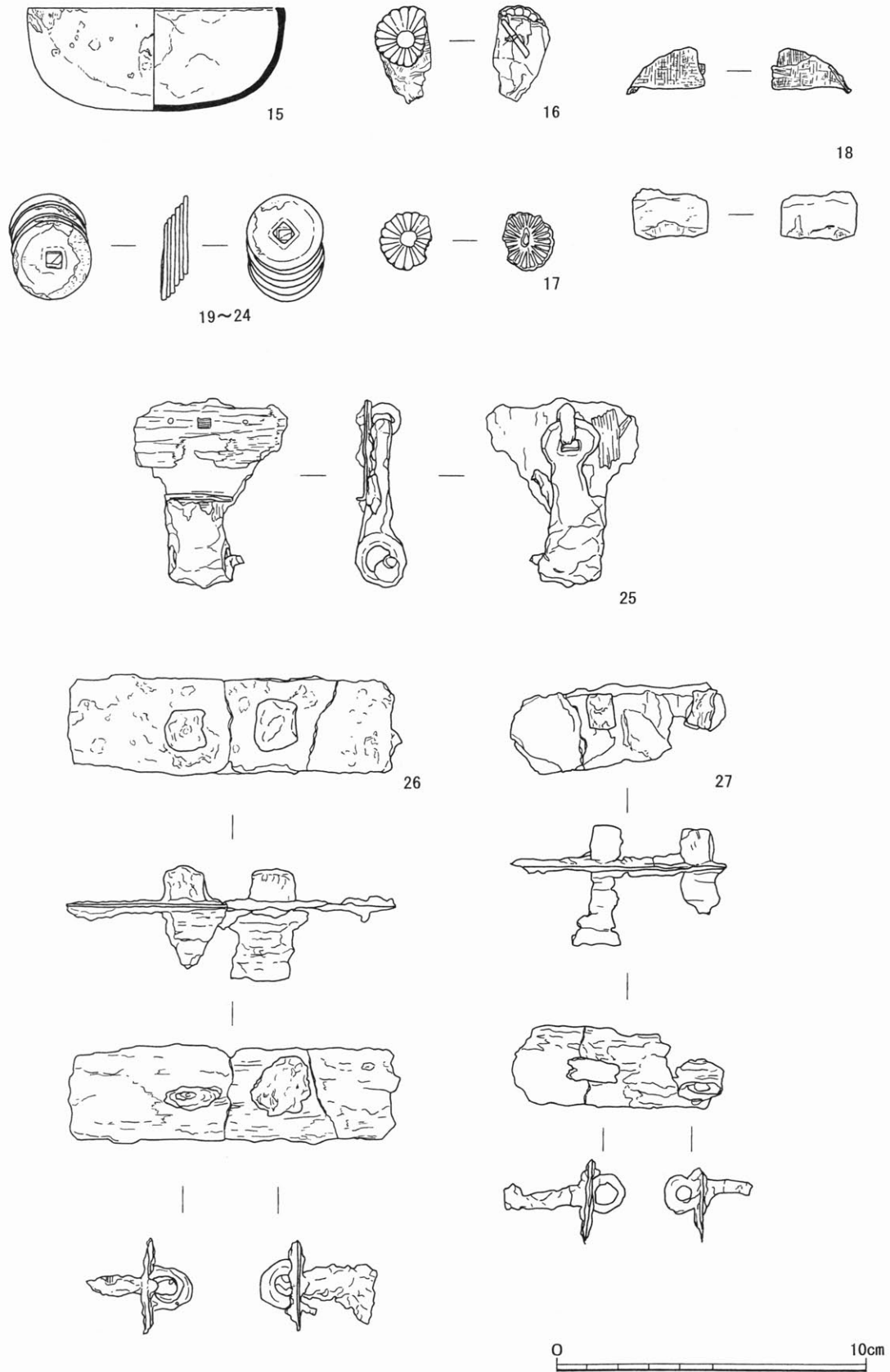
今回の調査では、調査地の南半部で近世の墓3基と北半部で中山城跡の土塁、空堀、曲輪、柵列と同時期に造営された可能性が考えられる古墓1基を検出した。



第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 出土遺物実測図(2)



第7図 出土遺物実測図(3)

近世墓の副葬品の状況は、被葬者が生前に使用していたものを埋納されたものと考えられる状況であった。さらにそれぞれの墓の被葬者が皆、錫杖をもっていたことなどから、これらの被葬者は修験道や仏道に強く係わった人ではないかと考えられる。埋葬形態では第4号墓と第5号墓から櫃に使用した鉄金具が出土していることから、この2基については転用した木棺が使用されたと考えられる。6号墓からは釘などの出土が認められなかったことから、桶など別の容器が使用されたと考えられる。

中山城跡に関する遺構は、城の構造物として明確に確認されたのは今回の調査が初めてである。

(戸原和人)

調査参加者(順不同)

小島健之助・真下春美・中村ひろみ・谷田一正・小東猪之助・小谷正志・加藤勝彦・千坂岩男・奥野正二・小谷良一・大江泰博・塩見 準・半治勝美・藤野 徹・山口輝雄・吉田美香・長尾美恵子

参考文献

「中山城跡」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

「中山城跡」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

「中山城跡第3次・中山近世墓」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

圖 版



(3) 1-2トレンチ(東から)



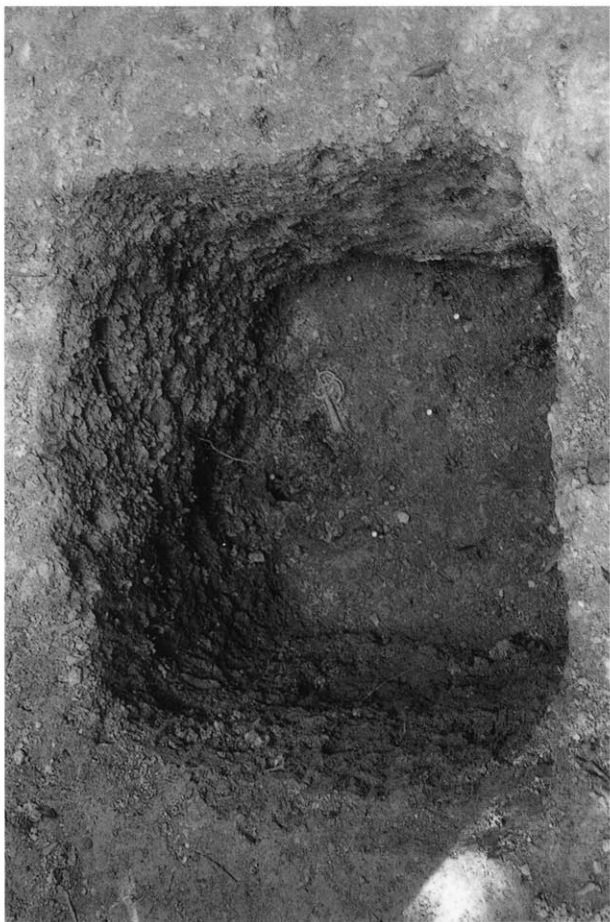
(4) 左から第4・5・6号墓(東から)



(1) 中山城跡航空写真(西から)



(2) 1-1トレンチ(北から)



(3) 第5号墓検出状況(南から)



(4) 第5号墓遺物出土状況(南から)



(1) 第4号墓検出状況(北東から)



(2) 第4号墓遺物出土状況(北東から)



(3) 中山城跡航空写真(南から)



(4) 空堀・土塁・曲輪・古墓検出状況-1(西から)



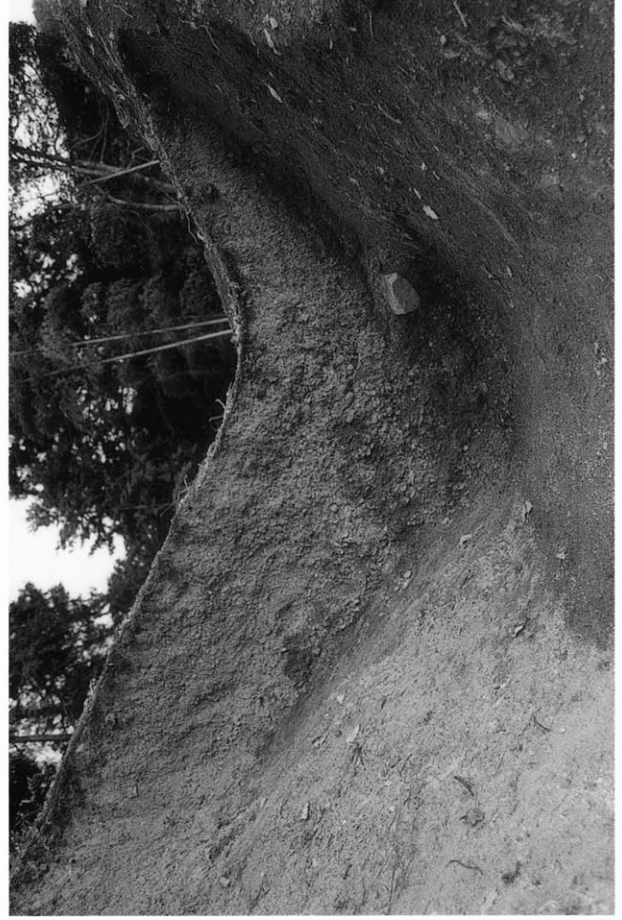
(1) 第6号墓検出状況(南から)



(2) 第6号墓遺物出土状況(南から)



(3) 空堀・土塁・曲輪南半部検出状況(東から)



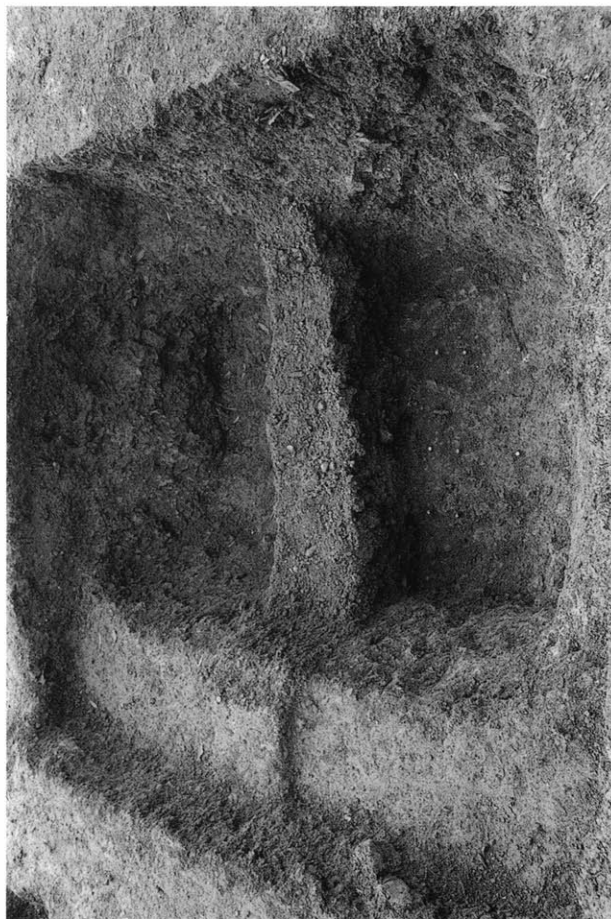
(4) 第1空堀東第1断面(西から)



(1) 空堀・土塁・曲輪・古墓検出状況-2(東から)



(2) 空堀・土塁北半部検出状況(東から)



(3) 古墓 S X 07 検出状況 (北から)



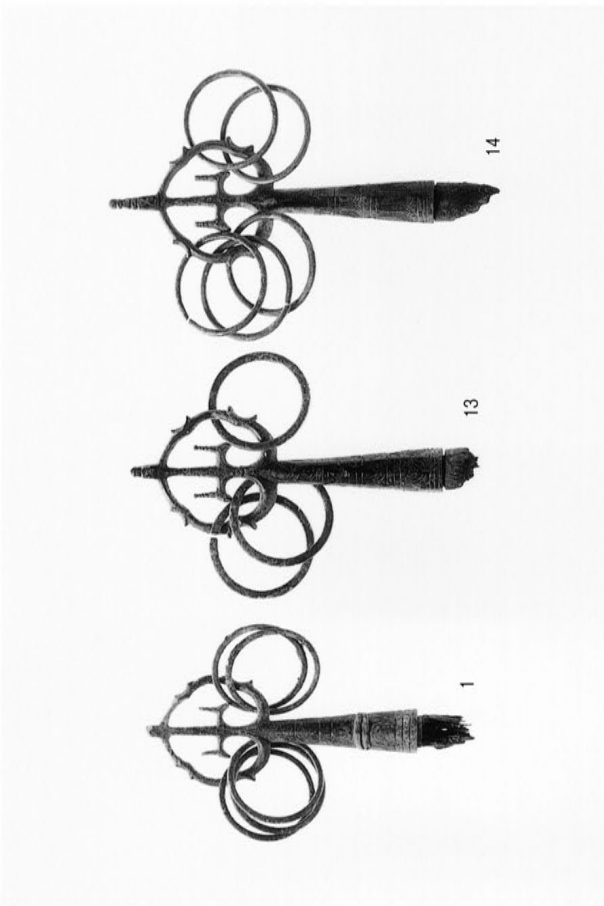
(4) 古墓 S X 07 遺物出土状況 (北から)



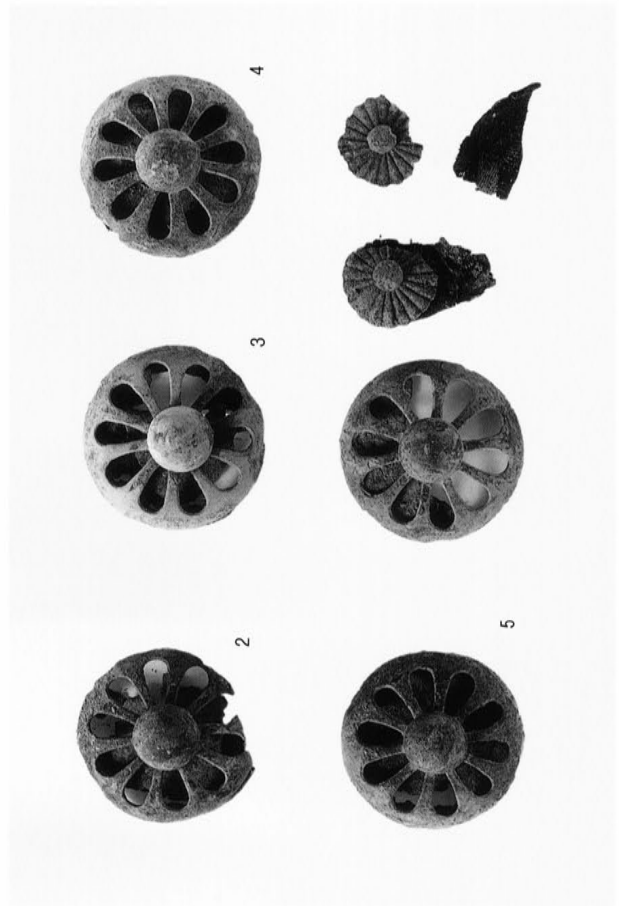
(1) 第1空堀西第2断面 (東から)



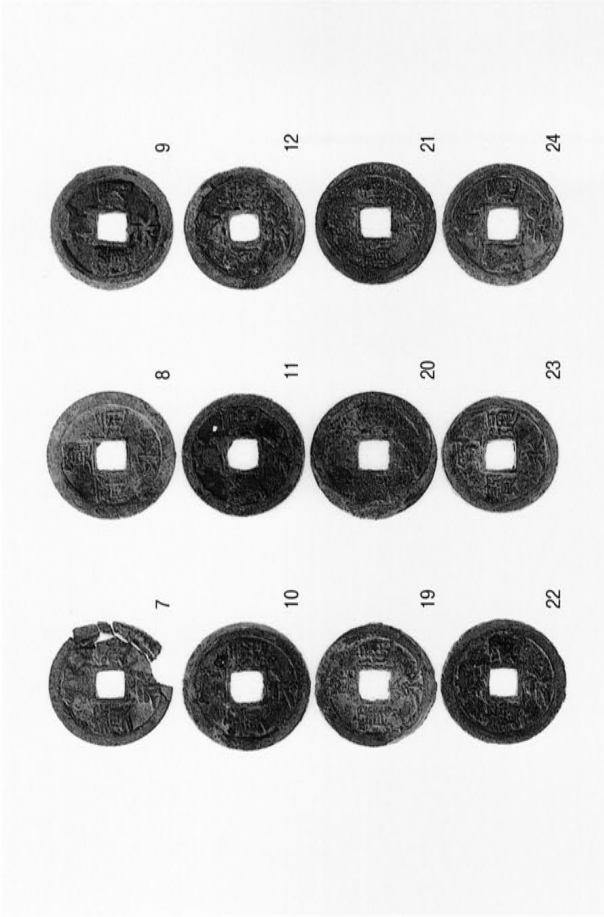
(2) 第1空堀東第3断面 (西から)



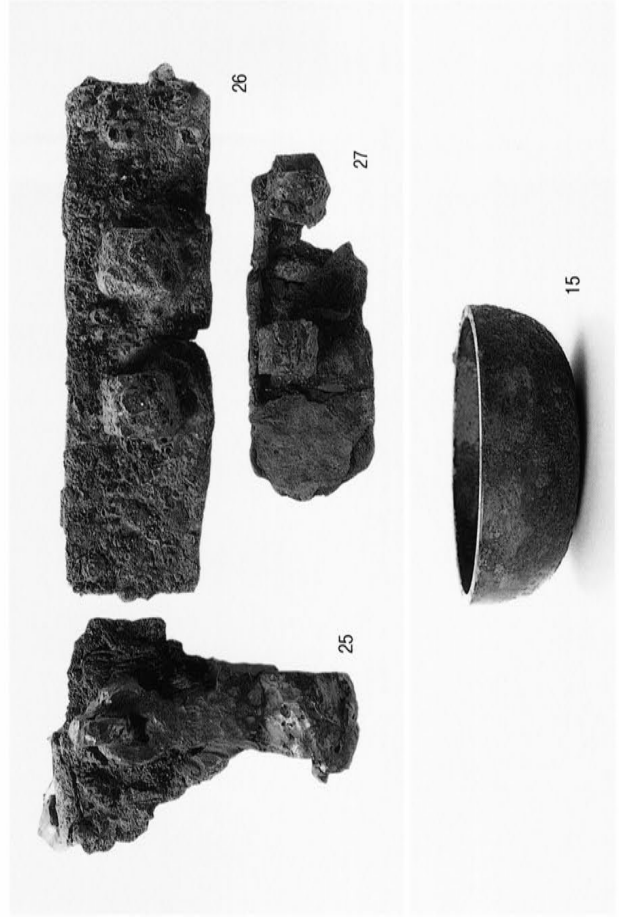
(1) 出土遺物 1 (番号は実測図による)



(2) 出土遺物 2 (番号は実測図による)



(3) 出土遺物 3 (番号は実測図による)



(4) 出土遺物 4 (番号は実測図による)